

研究論文

ニコス・カザンザキスの形而上学と正教神学試論

——『禁欲』を中心に——

La métaphysique et la théologie orthodoxe de Nikos Kazantzaki

キーワード：正教，ギリシア性，神人共働，自由，神の救済

Key words: Orthodoxie, Grécité, Synergie, Liberté, Salvation de Dieu

福田 耕佑 FUKUDA Kosuke

京都大学文学研究科博士課程

Abstract

Cet article s'occupe de l'idée de théologico-métaphysique de Nikos Kazantzaki (1883-1957) et analyse son œuvre « Ascèse » avec pour objectif de démontrer que son concept le plus important ' la Salvation de Dieu ' est dérivée de la théologie orthodoxe.

D'abord nous exposerons une courte biographie de Kazantzaki ainsi que le contexte historique en Grèce à cette période. Ensuite, après avoir vérifié les études pour Kazantzaki, nous analyserons « Ascèse » en nous aidant de ses autres œuvres et comparerons l'idée kazantzakienne avec les trois notions de la théologie orthodoxe, 'Synergie' et 'Ascension' et 'Liberté'.

Cela mettra clairement en exergue la relation entre Kazantzaki, la théologie orthodoxe ainsi que le motif de la 'Salvation de Dieu'.

0: カザンザキス略歴

ニコス・カザンザキスは1883年にギリシア・クレタ島で生まれた。アテネ大学法学部を卒業した後、1906年にはパリに留学し、ベルクソンやニーチェの哲学に触れる。またイオン・ドラグミス等の影響を受け¹、1912年にはバルカン戦争に従軍するなど、ナショナリストとしての活動を見せる。1917年には『その男ゾルバ』のモチーフとなったヨルゴス・ゾルバスと共同で鉱山経営を行った。また1919年ヴェニゼロス内閣で厚生局局長として南ロシア、コーカサス地方のギリシア人難民の本国帰還を支援する活動を行う。1922年、厚生局の職を辞しヨーロッパに渡り、ウィーンで仏教やフロイトの研究を行う。次いで共産主義に傾倒する。その後の3度にわたるロシア訪問で共産主義の限界を悟る。以降執筆と旅行に没頭し、『オディッシア』、『ニキファロス・フォカス』、『背教者ユリアノス』等の作品を残す。第二次世界大戦期は執筆活動を続けながらレジスタンス活動に従事し、独軍撤退後はソフリス内閣へ入閣する。1948年以降は南仏アンティープに定住し、執筆に専念する。この間に『キリストは再び十字架に』、『キリスト最後の誘惑』、『ミハリス隊長』等が書かれる。そして1957年フライブルクで客死する。

1: カザンザキス思想研究の現状と本稿の狙い

従来カザンザキスを論じる視点は、彼の文学作品を中心に置いたものよりも、彼の哲学や神学的な思想を論じるものが中心であった。特に、カザンザキスの哲学または神学的思想への考察に用いられる視点が、主にカトリック・プロテスタント圏の西欧的なものであったという事実を見逃してはならない。確かに、カザンザキス本人がベルクソンやニーチェの思想を自分自身の思想の中に十分に取り入れていたことを考慮すると、先述の傾向に妥当性を見出すことは可能であろう。一例を挙げれば、カザンザキスの自伝的作品『グレコへの報告』の第三十章のタイトルは「パリ；偉大な殉教者ニーチェ」である²。また『対談集』の第一章においても、『キリストは再び十字架に』における舞台となるリコブリシ村の舞台背景に、ベルクソンの哲学概念「閉じた社会」を応用したことを対談相手であるシプリオに語っている (Kazantzaki et Sipriot 1980 : 21-22)³。ま

¹ Ιων Δραγούμης (1878-1920) : 19 世紀から 20 世紀のギリシアの外交官、政治家。またギリシアの民族主義的作家。父親は首相経験のある Στέφανος Δραγούμης (ステファノス・ドラグミス)。バレス、ニーチェに影響を受ける。主著『ギリシア文化』 (Ελληνικός Πολιτισμός, 1914) , 『私のヘレニズムとギリシア』 (Ο Ελληνισμός μου και οι Έλληνες, 1903-1909)

² ギリシアで初めて著作一冊分割して取り上げられたドイツ人思想家はニーチェであり、それがカザンザキスの博士論文『正義と国家の哲学におけるフリードリッヒ・ニーチェ』であった。カザンザキスはドラグミスを通してニーチェを受容したのみにとどまらず、自身でもニーチェの著作の研究と翻訳を行い、ギリシアにおける最初期のニーチェ受容に大きな貢献を果たした (Terrades 2003 : 11) 。

³ 「閉じた社会」 les Sociétés closes。アンリ・ベルクソンの『道徳と宗教の二つの源泉』 (Les Deux Sources de la Morale et de la Religion) の中で用いられる用語。1957 年の『対談集』の中で、『キリストは再び十字架に』の舞台設定にベルクソンのこの概念が引用されていることが述べられる。またカンテラキが指摘するように、カザンザキスは、コレージュ・ド・フランスでのベルクソンの講義を受けたうえで、ギリシア語でベルクソンについて紹介し、『笑い』等の翻訳を行った。こ

た先行研究においてもミッドルトンのように⁴、ホワイトヘッドのプロセス神学とカザンザキスの神学的思想を比較する試み、またゼルミアスのようにカザンザキスとスピノザの神概念認識の近似を論じたケースも存在する (Tzermias 2005: 218)。

以上のように先行研究は、西欧の思想とカザンザキスの思想の比較、或いはカザンザキスが西欧の思想からどのような影響を受けたかについての分析が中心である。しかし以下に挙げるように、本稿では、カザンザキス本人が生涯「ギリシア的」なものを探求し続けた事を指摘する。例を挙げると、青年期のカザンザキスは1912年のバルカン戦争に従軍し、イオン・ドラグミス等の民族主義的な傾向を持った作家に傾倒したことが挙げられる。他にも、ピーター・ビエンが指摘しているカザンザキスのギリシア性 (Greekness) の探求が挙げられる (Bien 2007: 122-123)。彼によると、1940年にギリシアが第二次世界大戦の戦火に巻き込まれて以来、パラマス⁵やシケリノス⁶そしてセフェリス⁷等のギリシア人作家や知識人達が、特に古典古代をテーマにしたギリシアに関する作品を書き始め、ギリシア性 (Greekness) の探求を行った (Bien 2007: 167)。カザンザキスもその例外ではなく、彼が第二次世界大戦から内戦期に書いた作品は全てギリシアを主題として扱っている。しかし彼が他の作家と大きく異なる点は、古代から現代までの全時代のギリシアを取り上げ、特に現代のギリシアに焦点を当てたことである。特にビエンはカザンザキスの「ギリシア性」を彼の「生存・生き残り」 (continuity) と「東洋と西洋の折衷」に求めている。カザンザキスの「ギリシア性」の探究と彼の第二次世界大戦期及び内戦期における彼の文学作品の関係に関する考察は、他稿において分析を行っているので、そちらを参照されたい⁸。

本稿では、まずカザンザキスの哲学的・神学的思考を考察するためには、彼のギリシアへの考察を念頭に置かなければならないことを論じる。次いでカザンザキスが生きた当時のギリシアにおいても広く信仰されている東方正教の宗教的・神学的思想がカザンザキスに一定以上の影響を与えていることを論じたい。この試みによって、従来とは異なるカザンザキス理解を提示すると

のように、カザンザキスはギリシアにおいて初めてベルクソンを受容した思想家でもある (Kanteraki 2012: 501)。

⁴ Middleton, Darren J. N. (2000) *Novel Theology: Nikos Kazantzakis's Encounter With Whiteheadian Process Theism*, Macon: Mercer University Press.

⁵ Κωστής Παλαμάς (1859-1943): ギリシア文学史の「1880 年世代」に数えられ、また新アテネ派の創設者とされる詩人。多くの作品を創作した。ヘレニズム的な色彩の強い口語作品が特徴とされる。

⁶ Άγγελος Σικελιανός (1884-1951): ギリシアの詩人・劇作家。カザンザキスの友人。新アテネ派の創設者であり、第二次世界大戦期当時の代表的詩人であるパラマスが死去した際、葬儀で弔辞とギリシア民族を激励する演説を行う。この時期に『クレタのダイダロス』等のギリシアを扱った作品を残す。

⁷ Γιώργος Σεφέρης (1900-1971): ギリシアの詩人・外交官。ノーベル文学賞を受賞した。父親が「偉大な理想」を辛抱するヴェニゼロス主義者であり、青年期に多くの影響を受ける。

⁸ 福田耕佑 (2015) 「カザンザキスの思想とギリシアナショナリズムー彼の思想の根本と文学作品のライトモチーフとしての「叫び」の観点よりー」『エイコーンー東方キリスト教研究ー』46: 102-128, 東方キリスト教学会. また当論文の中でカザンザキスが現代ギリシアの中で果たした役割等の現代的な意義や古代ギリシア観についても考察している。

ともに、ビザンツ期より続いてきた正教的思考の伝統が20世紀の作家・思想家の中でどのように生き続けているのか、その一例を提示したい。

2: ギリシア性とカザンザキス

前章では、カザンザキスを考察するに際し、「ギリシア的」要素が度外視できないことを論じたが、本章第一節では、この問題の背景が生じた中世ビザンツ期から、カザンザキスの生きた20世紀前半までのギリシア人のギリシア意識 (*identité grecque*) の変遷を概説する。そして、第二節においては第一節を受けて、この様な20世紀のギリシアの中で、カザンザキスも時代背景の影響を受けてはいるものの、彼がギリシアに対して独自の思想を持ち、彼のギリシア観が彼の思想に大きな影響を与えていることを、具体的な事例を挙げつつ論証する。

2-1: 歴史的背景

現代ギリシア人のギリシア意識の大きな特徴に、相反する二つの起源神話を持つ、古典古代と中世ビザンツという過去を両方とも取り込み、単線的な歴史観を描こうとしている点がまず挙げられる。そして、こうした過去の文化と領土的栄光を誇ることによって、政治的にも軍事的にも対外拡張政策が促進され、現代ギリシア人は自らのナショナリズム思想をも形成していった。そしてギリシア意識の起源は、村田⁹やマクリッジ¹⁰等の研究によれば、おおよそビザンツ帝国の時期にまで遡る。

古典古代世界において、ギリシア人達は自分達を「エリネス」(Ἕλληνες・ヘレネス)と自称したが、中世のギリシア人達はもはやこの呼称を使用しなかった。中世ビザンツ帝国期において、ギリシア人達は自分達を「ロミィ」(Ῥωμαῖοι)と呼称するようになった。ここで言うロミィは、原義的にはローマ人(Romani)であるが、一つ目にローマ帝国の臣民であること、二つ目に正教徒であること、三つ目にギリシア語話者であることを含意している(村田 2013: 189-190)。当時のギリシア人達は、このロミィという言葉からも明らかなように、古典古代世界の異教徒であるギリシア人達を自分達とは直接の繋がりのない存在として意識した。

しかしオスマン帝国による統治を経て、19世紀初頭に西欧の啓蒙主義と民族国家の成立の影響がギリシアに及んだ。そしてギリシア啓蒙主義を代表する人物であるコライスは¹¹、ギリシア人にロミィの代わりに、「グレキ」(Γραικοί)という自称を用いるように提案した。このグレキと

⁹ 村田奈々子 (2013)「近代ギリシアにおけるヘレニズム概念について」『言語と文化』10: 181-205, 法政大学言語・文化研究センター

¹⁰ Mackridge, Peter (2009) *Language and national identity in Greece, 1766-1976*, Oxford: Oxford university press.

¹¹ Αδαμάντιος Κοραΐς (1748-1883): ギリシアの知識人。ギリシア啓蒙主義の第一人者であり、ギリシア独立戦争以前、オスマントルコ支配を宗教的に正当化する東方正教会を攻撃し、国内でトルコに対する革命的雰囲気醸成することに貢献した。特にギリシア古典世界と現代ギリシア世界の紐帯を強調し、古典ギリシア文献学でも大きな功績を残す。ギリシア口語を否定する純正語(文語)の創始者。

という言葉は、オスマン帝国の支配を宗教的に合理化する旧体制的な正教会と、その正教会の保護者であるビザンツ帝国の否定と、自分達ギリシア人が古典古代という偉大な先祖の子孫であるという意識を反映している。この近代のギリシア人がロミイではなく、古典古代のギリシア人の子孫・グレキであるという意識は、1821年にギリシア独立戦争を迎えたギリシア人が西欧列強に独立の支援を要求する時に決定的な役割を果たしただけではなく、独立後のギリシア王国にとっても重要な意識であり続ける。

しかしこの啓蒙主義にも大きな疑問が投げかけられることになる。1835年にドイツのファレライヤーが近代ギリシア人の起源について講演し¹²、近代ギリシア人と古典古代のギリシア人が血統においても、また文化的継承関係においても全く連続性が無いことを主張し、ギリシア啓蒙主義と独立の大義名分にアンチテーゼが示されることになった。

ギリシア啓蒙主義とファレライヤーの主張に対して、パパリゴプロスは啓蒙主義とは異なり¹³、身近な中世ギリシアとの連続性を重視する反啓蒙主義の立場から、ギリシア史を古典古代から中世ビザンツを経て現代まで一続きの連続として叙述しようと試みた。確かに市井のギリシア人にとっても、自分達と古典古代との結びつきは重要なものになっていたが、日常の中で自分達の父祖から伝えられた正教徒としての意識も捨てさることはできず、中世ビザンツを自分達の歴史から消し去り、正教を否定する啓蒙主義に反感を覚えていた。この背景の中でビザンツ帝国と正教の再評価が起こり、相容れないはずの古典古代と中世ビザンツが連続するものとして一直線に結び付けられた。

ここまで見てきたように、啓蒙主義派と反啓蒙主義派の間で理論的な対立が続く中、19世紀の中葉より「偉大な理想」という思想がギリシア人の間に蔓延し始めた¹⁴。これは過去の古典ギリシア人の子孫が、自分達現代ギリシア人であるという主張や信念に基づいて自民族の優越性を誇るとともに、過去の領土を失地回復する名目で対外領土拡張政策を合理化するような思想であった。この思想によってギリシア人はオスマン帝国下にある「民族的、歴史的見地からギリシア的と見なされる土地」、特に現イスタンブール（コンスタンディヌーポリ）のギリシア王国への編入を目指し、対外拡張戦争を繰り返した。このような戦闘的ナショナリズムの勃興によって、ギリシア人達は啓蒙主義と反啓蒙主義、王党派と共和派、純正語派と民衆語派¹⁵、親英派と親独派

¹² Jakob Philipp Fallayer (1790-1861): ドイツの東洋学者でありビザンツ学者。

¹³ Κωνσταντίνος Παπαρρηγόπουλος (1815-1891): アテネ大学教授を務めた歴史家。反啓蒙主義的立場を取り、中世ビザンツ世界の復権を唱えた。代表的著作は『ギリシア民族の歴史』(Ιστορία του ελληνικού έθνους)

¹⁴ Μεγάλη Ιδέα: 初めて正式に言及されたのは1884年の憲法制定議会でイオニアス・コレッティスの演説であるとされる。(村田 2012: 75-76, Terrades 2005: 35-45)

¹⁵ ギリシア王国の公用語を口語にするか文語にするのかという論争を指す。口語は民衆に広く用いられていた民衆語(δημοτική)であり、文語は古典ギリシア語を復活させた古典語(καθαρεύουσα)であった。当時民衆の中では古典ギリシア語から歴史の中で大きく変化した民衆語が話されていたが、19世紀には現代ギリシア人と栄光ある古典ギリシアの連続性を言葉の上でも保つために、よりギリシア古典に近い言葉を復活させ、公用語としようとした動きが強まっていた。

等の多くの対立軸を抱えながらも問題を棚上げし、自民族の誇示と領土拡張のためにかろうじて一致を保つことができた。本稿で扱うカザンザキスも1912年にバルカン戦争に従軍するなど、「偉大な理想」は多くのギリシア人に影響を与えた。しかし第一次世界大戦後のスミルナ陥落による小アジア領消失とローザンヌ条約による現トルコ共和国領承認により、ギリシアの領土拡張政策は失敗に終わり、事実上「偉大な理想」は失敗した。

2-2: カザンザキス個人の背景

確かにカザンザキスにとっても、一般のギリシア人と同じく、古典古代ギリシアと現代ギリシアの紐帯の問題は重要であった。彼の代表作である長編叙事詩の名前は『オディッシア』であった。またカザンザキスは『プロメテウス』や『現代語訳イリアス』を手掛ける等、常にギリシア人として古典古代を念頭に置き続けていた。しかし彼は啓蒙主義者のように現代ギリシア人が古典古代のギリシア人と血統的或いは文化的に直接結びついているとは考えなかった。彼はシプリオとの『対談集』において、自分達の祖先としてペリクレスやプラトンの名前を挙げる。カザンザキスによれば、ギリシア人が自分達の被支配と抑圧の歴史を通して理解した自分達の使命である「自由」に忠実であり続けるならば、自分達の民族に誇りを持ち、偉大な祖先にもふさわしく生きることができると述べている (Kazantzaki et Sipriot 1980: 39)。

しかし彼がここでこれらの古典古代期の偉人の名前を挙げるのは、単に現代ギリシア人が古典古代のギリシア人の直系の子孫であるということを誇るためではない。というのも、古典古代と現代ギリシアに血統的に直接の紐帯があり、現代ギリシア人が古典ギリシア人の直系であるという議論が幻想であり、自己暗示であると『対談集』において明言しているからである (Kazantzaki et Sipriot 1980: 39)。しかし彼はこの古典古代と現代ギリシア人の紐帯の意識によって生み出された自己暗示にも重要な点が存在することを指摘する。それはこの自己暗示が一種の信仰となり、常に現代ギリシア精神に深い影響を与え続けるとともに、この幻想が現代ギリシア人を生き残らせることに貢献したという点である。このようにカザンザキスにとって、古典古代との紐帯はギリシア性を語る上で必要な要素ではあるが、これに尽きるものではなかった。一章でも触れたように、ギリシア性を探求していた時期のカザンザキスは、古代から現代に至るまでの全時代のギリシアを射程に入れながら作品を執筆した。このことは上述の『対談集』における、ギリシア人が生き残ってきたというカザンザキスの発言に対応する。特にカザンザキスが自身の作品の中でギリシア性をΡωμιότητα (Romiosini) という「ロミィ」（ローマ人・ローマ帝国臣民）に由来する単語で表現している点は特筆に値すべきことであろう (Kazantzakis 1971: 27)。この「ロミィ」はビザンツ・正教的な要素と切り離すことができない概念であった。

またカザンザキス思想の普遍性とカザンザキス思想の「ギリシア性」との関係についても指摘したい。1954年に『その男ゾルバ』がフランスでの最優秀外国文学賞を受賞し、後に同作が映画

この論争そのものに決着がつけられるのに、1976年に軍事政権が崩壊し、憲法で民衆語を公用語と決定されるのを待たなければならなかった。

化されるなど、カザンザキスはギリシア国外でも高い評価を受けた。また前章でも確認した通り、彼の思想は、西欧の思想や神学と比較されることが多く、必ずしも彼の思想と作品にはギリシア的な要素が不可欠だとはみなされていないのが現状ではなかろうか。しかし実際には、以下に述べるように、シプリオとの『対談集』において自身の文学作法について明確に語っているところから、彼が著述や思索において明確にギリシアを意識していたことは明らかである¹⁶。

この対談において、カザンザキスは自身の小説の文体 (style) について語る。まず20世紀によく見られる文体として、style grand magazin を第一の文体として挙げる。彼はこの文体に対して「国際性を装うが、根が無く、空中を漂っているような感覚を受ける」(Kazantzaki et Sipriot 1980: 23), と述べる。どのような作品や作家がこの文体に属するのかは明示しないが、彼はこの文体に対し否定的な態度を取っている。

これに対し、彼は民族の中に根を持ち、特定の人々の特定の考え方、感じ方、生き方、死に方を扱う「地域的、或いは民族的小説」を第二の文体として挙げている (Kazantzaki et Sipriot 1980: 23)。この文体は、カザンザキスによれば、その土地土地の記念碑的な作品であるが、読者の感受性を豊かにすることができるものである。

そして、民族やある種の固有性に根差した思想や作品が、国境を越えることができたときに初めて、小説があらゆる民族と人々に当てはまるものになると述べている。カザンザキスは、これを第三の文体と位置付けている。彼によれば、小説の国際性と普遍性は演出によって生み出されるものではなく、特定の民族の跳躍 (essor) を掴み¹⁷、これを描き出すことで得られるものである。このようにしてはじめて、小説は全民族に通底し、普遍的なものにまで至ることができる。

この『対談集』の中でカザンザキスが語ったことから、彼の意識がまずギリシアへと向けられていることは明らかである。そして、三章四節で分析するが、カザンザキスは同様に思想面においても、民族を経て普遍へと至るという思考構造を一貫させている。

ここまでカザンザキスが生きた時代の背景やカザンザキス個人の思想的背景を確認した。当時のギリシア人にとって、古典古代からビザンツ時代を経たギリシアの歴史は重要なものであり、これはカザンザキスにとっても同様であった。これまでの先行研究では先述のように西欧の思想とカザンザキスの思想を比較することが中心であったが、カザンザキスの思想を考察するにあたって、上述の時代背景とカザンザキスの個人史の中でギリシアをテーマとする思考の影響を考慮しなければならない、と考えることは極めて妥当である。

3: カザンザキスの思想

前章ではカザンザキスが生きた時代のギリシアの背景とカザンザキスの執筆活動について確認した。そしてカザンザキスの思想を考察するにあたり、「ギリシア的」要素を念頭に置く必

¹⁶ Entretiens (対談集) の特に第二部の「小説家とギリシア精神」(le romancier et l'âme grecque) と「小説の心理」(Psychologie du roman) より。

¹⁷ この語はギリシア語で ορμή (勢い、跳躍) にあたる語であると考えられる。

要があるということを論じた。本章ではカザンザキスの哲学的、神学的思想の中からカザンザキスに見られる東方正教的な要素を見出す試みの準備として、彼の思想的著『禁欲』の分析を行う。

3-1: 先行研究紹介

カザンザキスを東方正教的な伝統の中に位置づけて解釈しようとする近年の先行研究は主に二つ存在する。一つ目はドブロウスキーの「カザンザキス、カルケドンの正教と単性論」であり¹⁸、二つ目はパメラ・フランシスの「ニュッサのグレゴリオスを通してカザンザキスを読む」である¹⁹。特にパメラ・フランシスはカザンザキスを正教の文脈の中で読む根拠として、カザンザキスがヘラクリオンで高校生活を送っていた期間に、『東方正教の教義』を著し、後にアテネ大学で組織神学の教授職を務めることになるフリストス・アンドゥルツォス²⁰に大きな影響を受けたことを紹介している (Francis 2005: 60-61)²¹。

ドブロウスキーの研究ではカザンザキスの基督論について扱っている。カザンザキスはキリストの神性に関して、イエスが完全に神でもあり人間でもあり、これらの二性質が完全に明確に異なる、とは理解しなかった。カザンザキスにとって神性は、明確に異なる精神と肉体という両面に基づいており、ここに神性と肉体、また神性と精神の厳格な区別は成り立たない、と論じる (Dombrowsky 2005: 47)。ドブロウスキーは、カルケドンの教理とカザンザキスの基督論の差異を詳述する際に『フィロカリア』等も典拠に持ち出している²²。しかし彼の中心的な関心はカザンザキスの基督論とカルケドン信条的な基督論との対比であり、カザンザキスと東方正教が厳密には対比軸とはなっておらず、ギリシア・東方正教の関係性を探るという本稿の目的にはそぐわない。

またパメラ・フランシスは、これまでの研究ではカザンザキスが生まれ育った環境に根付いていた東方正教の影響が考慮されていないことを明確に述べ、特にニュッサのグレゴリオスとカザ

¹⁸ Dombrowsky, Daniel A. (2005) “Kazantakis, Chalcedonian Orthodoxy, and Monophysitism”, in Middleton, Darren J.N. (ed.), *Scandalizing Jesus? Kazantzakis - The Last temptation of Christ Fifty Years On*: 47-60, London: Continuum.

¹⁹ Francis, Pamela J. (2005) “Reading Kazantakis through Gregory of Nyssa”, in Middleton, Darren J.N. (ed.), *Scandalizing Jesus? Kazantzakis - The Last temptation of Christ Fifty Years On*: 61-71, London: Continuum.

²⁰ Χρήστος Ανδρούτσος (1869-1935): ギリシアの神学者、哲学者であり作家。現イスタンブール(コンスタンディヌーポリ)、次いでハルキ (Χάλκη, 現在トルコの Heybeliada) の神学校で学ぶ。彼は各地で教師を勤めるが、クレタで教師をしていたことがあり、この時にカザンザキスと出会ったと推測される。1912年から35年に亡くなるまで、アテネ民族大学 (Εθνικό Πανεπιστήμιο της Αθήνας) で教義学とキリスト教倫理で教鞭を取る。主な著作は『東方正教会の教義』 (Δογματική της Ορθοδόξου Ανατολικής Εκκλησίας)。

²¹ アンドゥルツォス個人の思想に関しては(ΑΝΓΥΡΟΠΟΥΛΟΥ 1998: 535-545)を参照。

²² Φιλοκαλία τῶν Ἱερῶν Νηπτικῶν: 4世紀から15世紀までの東方正教の担い手たちによって書かれた文章の選集。特にビザンツの修道靈性、「イエスの祈り」の理論と実践に関する記述が存在する。

ンザキスの思想を比較し、カザンザキスの「上昇」や「自由」の典拠を東方正教に求めている (Francis 2005: 64-67)。

本稿では上記の先行研究の仔細な検討は行わないが、パメラ・フランシスの研究と同じように、カザンザキスの思想が東方正教と密接に繋がっていることを示す一つのケースの探求として、カザンザキスの思想的著と目される『禁欲』を分析する。

3-2: 『禁欲』の位置づけと本研究の中での意義

『禁欲』は1923年、カザンザキスが40歳の時に、ベルリンで書かれた彼の思想的モチーフが最も現れた散文である。この作品は黙示文学と呼ばれ、原題はΑΣΚΗΤΙΚΗ (禁欲) であり、副題は *Salvatores Dei* (神を救う者達) である²³。

1928年には「沈黙」の章が付け加えられ、先述の45年に大文字のエピローグを加えられた版が出版される。カザンザキス本人も1957年の対談で、「私の著作は全て『禁欲』の注釈と説明に過ぎない」、或いは「私が創作したもの全て—小説、劇、詩—は全てこの叫び（後述）の注釈に過ぎない」とも述べ、この作品の重要性は疑いない。このように『禁欲』は長年に渡って内容の付け足しはあったものの書き換えられることなく、彼の念頭に置かれ続けた。また彼の著作で補筆が加えられたのはこの作品だけであり、カザンザキスのこの作品への執着が窺える。

先行研究でも、ジャンオ・リュストはこの作品を「純粋に神学的」 (Janiaud-Lust 1970: 202)、プレヴェラキスは彼の「哲学活動は『禁欲』をもって終了した」と述べている (Janiaud-Lust 1970: 202-203)。またビダル・ボディエ (Bidal-Baudier) はカザンザキスの思想の根本が不死であると述べ、『禁欲』の著作にこそこの思想が現れていると論証している (Bidal-Baudier 1974: 250)²⁴。

ここまで先行研究でも論じられてきたように、1923年の『禁欲』初版の出版以来、追加こそあれ、内容そのものへの改定は一度も加えられることが無く、一回の改訂を経て1945年の最終版まで、20年間に渡り、内容に根本的な変化がなく、カザンザキスがこの著作を考察し続けてきたことは疑いない。

3-3: 『禁欲』の分析

『禁欲』の副題は「神を救う者達 (*Salvatores Dei*)」である。そしてこの副題の通り、「神の救済」、そして人間自身の救済が物語られる。言うまでもなく、「神の救済」という概念はキリスト教では考えられもしない概念であり、異端的である。第四章で後述するように、この「神の

²³ 英訳を作成した Kimon Friar によると、1928年時には書名と副題は今の逆だったが、1945年の版で今の書名と副題に改められた。そして英訳に際し、カザンザキスの許可を得て書名を *The Saviors of God* に変更し、副題として ΑΣΚΗΤΙΚΗ を *Spiritual Exercise* とした。

²⁴ また同じ個所でビダル・ボディエによれば、『キリスト最後の誘惑』のイエスは死が自分の束の間の生を不死に変える唯一の手段であることを知っていた。そしてこの点で基督は全人類に対して普遍的な意味を持つものであり、彼こそ「叫び」に従い、人間の生の快樂も苦痛も両方とも喜んで受け入れた、不死を体現した英雄の一人である、とされる。

救済」という概念は、カザンザキスが生まれ育ったギリシアで信仰されている東方正教の中にその萌芽を求められるが、文学的なモチーフとしては、彼が大きな影響を受けたニーチェの「神は死んだ」に由来することは疑いえないだろう。

そしてこの作品は、論理的な論証を通してではなく、後述の「光景」(TO OPAMA / la Vision) を黙示文学的な文体を通して描くことで、カザンザキスの神論・形而上学的思想を宣言している。この作品は序文と5つの章、そしてエピローグで構成されている。そしてこの5つの章が「準備」, 「前進」, 「光景」, 「実践」, 「沈黙」というカザンザキスにおける人間の意識の発展の段階をその章の名前としている。以下にその内容を述べる。

(i) 「序文」・「準備」

この作品は心の中の「助けてくれ！」(Βοήθεια!) と訴えかける目には見えない「叫び」と共に始まる (Kazantzakis 1985: 27)。それ以前の叙述は単なる背景に過ぎない。この「叫び」は後述の通りカザンザキスにとって「神」或いは「神」に由来するものであるが、これが形而上学的にどのような存在であるのか、或いはどのような思想から影響を受けたものであるのか、という議論は稿を変えて改めて論じたい。またこの『禁欲』は「叫び」によって物語が始動するが故に、もし人がこの「叫び」に耳を傾けなければ、この作品は始動しない、ということになる。

この助けを求める「叫び」は同時に「上へ！上へ！上へ！」(Απάνω! Απάνω! Απάνω!) と叫ぶことにより (Kazantzakis 1985: 29), 上へと向かう前進を引き起こす。こうしてこの「叫び」は作品を始動させる役割を持ち、これから見ていくように、作品の最後までプロットを牽引していく²⁵。

(ii) 「前進」

この「助けてくれ！」という「叫び」は或る人間、個人の心の中に起こるものであり、個人に属するものであった。しかしこの「叫び」を耳にした人はこの「叫び」が個人のみに向けられたものではなく、自分の属する民族にも属するものであることを悟る。自分自身はこの目には見えない「叫び」の一つの顔 (το πρόσωπον) に過ぎず、自分の前の顔が自分の先祖であり、次の顔が自分の子孫であることを悟る。しかし、この「叫び」は民族だけでなく、人類、そして水、木等の物質、動植物、そして神等の観念の全てに属するものであることを悟る。こうして「叫び」に促された「前進」は「叫び」を聞いた個人だけでなく、あらゆるものの全体にまで行きわたり、「上昇」は永遠に続いていくことになる。重要なこととして、カザンザキスにとって、「叫び」はあらゆるものに関係し、全てのものをその射程に含めている。

(iii) 「光景」 (la vision)

そして先述した「光景」が、あらゆるものが「叫び」に促されて「上昇」している様であるこ

²⁵ この前進はカザンザキスの“self-creation”であると表現される。(Wilson and Dossor 1999: 9)

とが明らかにされる。そしてこの前進は神を救うための戦い、戦場への前進である。またこの「叫び」こそが「偉大な息」、神に他ならず、自分が助けを求めたあらゆるものを捨て去ってでもさらに前進を続けていこうとする存在であるということが描かれる。この様は本文では「私達は彼らの魂（自由への跳躍）が私達から逃げ出そうと、植物や動物と一緒に私達を置き去りにしようと、もっと上に飛ぼうと戦っていることをふるえながら感じている。来た—偉大な喜びと苦しみ！—私達先駆者が置き去りにされる瞬間が！」という形で表現されている (Kazantzakis 1985: 55-56)。

だがここで当然、「叫び」を聞いたとしても、必ずこの「叫び」に従う必然があるのか、という疑問の余地を人間の理性は差し挟む。この「叫び」はそもそもこの「叫び」のために戦った一個人を犠牲にして見捨てるものであり、また従わないものにいかなる罰も下さない。カザンザキス本人も人間には理性があり、なぜこのような前進に従わなければならないのか、という疑問が生じると述べている (Kazantzakis 1985: 59)。またこの言葉の通り「叫び」に人間が従うのは、必然でもない。そうではなく、叫びを聞いた者が自分の意志でもって選択しなければならない。「叫び」に従うことは「義務」である。このことは本文では、「私達の義務は、この叫びを聞いて神の旗の下に走っていくこと、神と共に闘うこと。神を救うのか、或いは一緒に滅びてしまうかの二者択一」と表現されている (Kazantzakis 1985: 70)²⁶。そしてこの問題に関して、ジャンニオ・リュストはこの闘いに論理的な理由は求め得ず、この神は人間的な因果性を超越している、と述べている (Janiaud-Lust 1970: 204)。

(iv) 「実践」

そして次にこの「光景」の中で、「叫び」に耳を傾けた者のなすべき実践が明らかにされる。実践とは「救済への広い門」 (η πλατύτερη θύρα τής λύτρωσης) であり (Kazantzakis 1985: 63)、助けを求める「叫び」に耳を傾け、この神を助けるために神と共に「上昇」することである。神は助けを求める存在であり、私達が彼の「叫び」に耳を傾け、共に「上昇」し始めなければ神自身が救済されることはあり得ない。つまり「もし私達が自分自身の闘いで神を救うことができないのなら、神は救われない。神が救われないのなら私達も救われることはあり得ない。私達は一つである」 (Kazantzakis 1985: 70)。私達の助けてくれと言う「叫び」に従った前進が、実は神を救済するための前進であり、ひいては自分自身、世界の救済のためであったことが明らかにされる。この神の救済と人間の救済の一致、そして神が助けを求めるという発想は、文学作品『兄弟殺し』の中によくあらわれている。この中で、基督の形をとった「叫び」は主人公・ヤンナロス神父に自分を救うように助けを求め、全ギリシアの、ヤンナロス個人の、そして飢えている民衆の救済

²⁶ ここに、ニーチェの「神は死んだ」のモチーフが反映されていることは明らかであろう。またこの作品には二度「超人」の語が使われる。カザンザキスは自身の博士論文において、超人を「今存在する価値の標識を英雄的に断ち切り、今よりも高く、より調和しながら人間の本性を拡張することができ、その生の目標として永遠に自分自身を高めていくように自己を定立できる存在」と規定している (Kazantzakis 1909: 107)。

と神自身の救済とが同一であることを述べている（福田 2017: 119-120）。

この救済のために求められる人間の取るべき行動、神の求める倫理、即ちカザンザキスの倫理観とは、人間が連帯し (Bidal-Baudier 1974: 188)²⁷、神の自由のために戦う道具になることである。そして最良の徳とは、自由の享受そのものではなく自由を求めて闘うことそのものである、と定義される (Kazantzakis 1985: 82-83)。神の本質とは闘いであり、神は「上昇」し、神のために戦った私をも捨て去って「上昇」を続けていく。そして「叫び」に耳を傾け、神の「上昇」を助けるために戦った者は、この神によって見捨て去られるという運命を英雄的に受け入れなければならない。「神は自分の好きな形で、例えば踊り、愛、宗教、殺戮、将軍、王、ブルジョワジー等の形で人間の下に下った。そこで人間は諸文明を生み出し、神性を自由にした」(Kazantzakis 1985: 78)。そして個々人はこの人類や世界の形を取った営みの中で、責任と犠牲を引き受けなければならない、自分自身の能力に応じて、自分自身の救済のために、神の自由に貢献しなければならない。

ここでは、「叫び」を耳にした人間は神の自由のため、また神の救済のために闘うと述べられていた。このことは、自由そのものが重要ではなく自由のために闘うことそのものが重要であると述べられているように (Kazantzakis 1985: 82-83)、この救済や自由の内実に関する説明は『禁欲』の中では行われ²⁸ない。

(v) 「沈黙」・エピローグ

カザンザキスの禁欲の最終段階として登場するのが「沈黙」である。神＝「叫び」に耳を傾け、この「叫び」と自分自身の救済のために戦った者は最終的に自分の闘いを終えることになる。そして自分自身は森羅万象と溶け込んでいくことにより、自身が出てきたところの深淵 (η ἀβυσσος) に還り、不死を享受する。そして自分自身を置き去りにした「叫び」は次の世代の耳を傾けるものと共に「上昇」を続け、世代から世代へとこの闘いは永遠に受け継がれていく。

3-4: 考察

前節で5つに分けて『禁欲』の全体像の概観を行った。まず「叫び」が担わされている役割につ

²⁷ *fonder une communauté religieuse* と表現される。またカザンザキスは、自身の博士論文において、ニーチェの国家論とは別個に、共同体論について分析している。カザンザキスによると、ニーチェは各々の権利と義務、また法とその目的の違いによって二つの序列を設けた。下位の序列は、ブルジョアジー・中流階級からできた、機械のような共同体である。これは農民、職人、商人、経営者、そして学者等、そして日々の仕事を忍耐することで生きている労働者を含んでいる。そして高位の共同体は、その職業が問題なのではなく、より高い価値を保ち、それに従う義務と使命を共有する者達である。力、支配、より高位に位置するものは、安全よりも、生きる活力を渴望し、創造の不安と危険から人々を解放していく (Kazantzakis 1909: 108-109)。このように後者のニーチェの共同体観は、『禁欲』におけるカザンザキスの共同体論に反映されている。

²⁸ 例えばカーデルバッハはカザンザキスの「自由」を「展開」(Entfaltung) だとしているがこれに尽きるものではなく、難解である (Kadelbach 2006: 72)。

いて確認する。「叫び」はこれに耳を傾けることのできた人間を「上昇」へと動かす力のようなものであり、カザンザキスの思想と物語の出発を促すものであり、『禁欲』の中で物語全体を牽引していた。「叫び」はこれに耳を傾けた者をその死まで導くが、この「叫び」に促され、神の救済に助力し、自身の死をもって不死に至る道を歩む者をカザンザキスは「英雄」と捉えているのである。

この「英雄」は「叫び」に耳を傾け、神の救済と自由のために戦う者を意味していた。確かに、『禁欲』において直接「英雄」という言葉は登場するが、この言葉が大文字で使われ、特殊な意味を持つことが示唆されることはない。しかし、「私があなたにふさわしいと信じている狭きもの(τα στενά)を勇敢につかめ。それを手放してはいけない。あなたには義務があり、そしてあなたは自分自身の場所にとどまることで英雄になることができるのだ」という言葉に見られるように(Kazantzakis 1985: 32)、「英雄」は助けを求める「叫び」を聞けば、戦わねばならないという自身の「義務」を受け入れ、最終的にはこの「叫び」に見捨てられるとしても、これを受け入れて神と自分自身の救いのために戦うことになる。そしてこの英雄は自分が生まれ、育った世界、民族の中で、自身の持てる力を尽くして死ぬまで戦い、この死を通して、人間が生まれた「深淵」と「沈黙」へと還り、不死に至ると述べられる。

最後に『禁欲』の中に見られる「民族」について言及する。確かにカザンザキスは『禁欲』を通して民族を概念として定義してはいない。しかし、前節でも指摘したが、「叫び」が普遍へと至るためには、個人から出発し、民族の段階を経る必要があった。カザンザキスの「叫び」の思想においては、個と全体のいわば「媒介」として民族が扱われていると言えよう。この着想は、第二章でも触れたが、シプリオとの『対談集』において述べられたカザンザキスの文体論とも一致するものである。ここで扱われた「民族」を、カザンザキスは自身の文学作品において具体的にギリシア民族を通して描いていくのであるが、彼の文学作品を具体的に分析することに関しては稿を改めて論じたい。

4: カザンザキス思想と正教神学

本章では、前章で検討したカザンザキスの思想と東方正教に見られる神学的な要素の比較を行う。この比較を通じて、カザンザキスの救済の過程に関する思想の直観が、東方正教の神学や思想に由来することを論証する。

カザンザキス本人が、正教の聖職者や正教に由来する村民達の習慣を文学作品の中に描きこしたが、彼自身の思想と正教の思想及び神学とを直接比較し、またその影響関係について言及した個所は彼の作品には見られない。このことは先述のパメラ・フランシスもカザンザキスの思想と正教を結びつける根拠に、彼が高校時代をフリストス・アンドゥルツォスの下で過ごしたことを挙げることでしかできなかったことから伺われる。カザンザキスの思想と正教の直接的な紐帯を保証する彼の発言や記述に関しては、管見の限り存在していない。

4-1: 「上昇」と「神人共働」，そして「神の救済」

本節ではパメラ・フランシスも指摘していた、カザンザキスの『禁欲』における「上昇」概念について考察し、そのモチーフを正教神学の中に見出す試みを行う。パメラ・フランシスは「神化」に至る過程をニュッサのグレゴリオスが「上昇」と見做していたことを指摘し、カザンザキスの上昇のモチーフの典拠の一つとしていた (Francis 2005: 64)。ただニュッサのグレゴリオスの「上昇」に限らず、例えば聖証者マクシモス²⁹も「神化」に至る段階の一つに「上昇」を数え入れている (『難問集』PG91, 1237CD)。またメイエンドルフは、ビザンティン・正教神学の中心的直観認識が、人間が神との「交わり」によって規定される力動的な存在であり、この関係が「上昇の過程」として捉えられる点である (メイエンドルフ 2009: 17) と述べている。このように神との「参与」 (μετουσία) の関係の中で救済へと「上昇」するという「神人共働」 (synergie) による救済観は、確かに十分な検討を要することであるが、ニュッサのグレゴリオスの思想に限らず、カザンザキスが東方正教から受けた影響とみなすことの方が理にかなうように思われる。

カザンザキスの「上昇」に関しては前章で取り上げた。特にカザンザキスにとって、この「上昇」の道は、彼の著書『禁欲』が示す通り「禁欲」であった。この作品の中で、カザンザキスは二度「禁欲」という単語を用いているが、その内容が明らかになる仕方で描写されているのは、以下に示す一か所だけである。

各々は自分を救済へと導く自分自身の道を有している—ある者には徳、またあるものには悪徳。(中略)むしろ私達の(救済のための)³⁰前進を追い求めよう。セイレーン (Σειρήνες)³¹を捕まえて、私達の船の中に投げ込み、彼女たちと共に旅に出よう。戦友よ、これが私達の新しい禁欲 (η καινούρια Ασκητική) だ!

神は私の心の中で叫ぶ：私を救え!

神は人間、動物、植物、物質の中で叫ぶ：私を救え!

あなたの心の声に耳を傾け、その声に従え。あなたの肉体を粉々にして、視力を取り戻せ：私達はみなひとつだ! (Kazantzakis 1985: 85)

この引用箇所、カザンザキスの救済への「上昇」と「禁欲」の関係が良く現れている。ここでセイレーンは救済への前進と「上昇」を妨げる誘惑を表している。第三章でも触れたように、この誘惑は、「上昇」の理由を問う理性であり、また助けを求める「叫び」に耳を傾けない態度

²⁹ Μάξιμος ο Ομολογητής (580-662)：単意論への反駁を行ったギリシア教父であり聖人。

³⁰ この括弧書きの挿入は本稿作成者によるものである。

³¹ ホメロスの『オデュッセイア』にも登場する、上半身が人間の女性で、下半身が鳥である海の怪物。美しい歌を航路上で歌い、船乗り達を惑わして、船の難破や船乗り達の遭難を引き起こした。

等の様々な形態を取りうる。しかしこれらの妨げを振り切り、「叫び」と共に「上昇」することを自らの意志で決断し、たとえ自分自身は滅びることになっても、「叫び」を救うために自身の生を「英雄的に」捧げることがカザンザキスにとっての「禁欲」であった。確かにカザンザキスの「禁欲」そのものは、東方正教における修道院の禁欲概念と大きく異なる。セイレーンは怪物とはいえ、その性は女性であり、女性を自身と同じ船に身を置く禁欲というものは明らかにキリスト教的な倫理観には反するであろう。カザンザキスは自身の旅行記や自伝的著作である『グレコへの手紙』の中で、自身が聖アトス山を訪れた経験を詳細に記している。また後期の小説である『その男ゾルバ』、『キリストは再び十字架に』、『兄弟殺し』、『キリスト最後の誘惑』、『アッシジの聖者』の中にも修道院や修道制が描かれている。この点から、カザンザキス本人が伝統的な修道や禁欲のあり方を熟知しながらも、あえて異なったあり方の「禁欲」を描いていることは明らかであるが、東方正教の霊性における禁欲とカザンザキスの「禁欲」の関係については稿を改めて論じたい。

そしてこのカザンザキスの『禁欲』における上昇は、パメラ・フランシスも指摘している通り、第一に神への「参与」であり「神人共働」である (Francis 2005: 64)。「助けを求める神を救済」するための闘いが行われなければ、『禁欲』で述べられていたように、人間の救済も存在しない。まさにこの「上昇」は人間の救済のためにも行われるものであった。メイエンドルフは、「上に向かって開かれた神の像」である人間が自己を超越し、神との「交わり」の中で「神化」を達成していくという見方を提示している (メイエンドルフ 2009: 220)。これはカザンザキスが『禁欲』において示した思想の構造にも通じるものであり、カザンザキスが「上昇」の概念を東方正教の「上昇」観より得ていたことは明らかである。

そしてこの「上昇」は救済のためであったが、カザンザキスの思想は、プロテスタントにおけるような、「人間の救済」が神からの一方的な恩寵のみによらず、人間の協力を必要とする、ということだけに留まらない。カザンザキスの「神人共働」は、人間の救済のためのみならず、「神の救済」のためであった。確かにニーチェの「神は死んだ」のモチーフがあたったからこそ、「神の救済」が必要になったのであろうが、救済に対する「神人共働」の考え方がなければ、「神の救済」のために英雄的に行為する人間という発想も、「人間に助けを求める神」という発想も登場しえなかっただろう。『禁欲』は一人称の視点から見た、一人称の自分が主体的に物質から思想までも含めた全てを巻き込みながら「上昇」していく物語であり、カザンザキスの「神の救済」は「神人共働」において、人間の行為と人間の主体性に大きな価値を置いた、物質から神といった全てを含んだ救済論である。また、このようなカザンザキスの「上昇」と救済論に、正教からの影響を伺えるが、これはカザンザキスに独特な思想であり、キリスト教から異端的思想であると判断されることはやむを得ないであろう³²。

³² ギリシア王国の国教であったギリシア正教の否定的側面や一般的なキリスト教の理解とは異なるキリスト像を描くことになり、その結果ギリシア国外への追放処分を受けた。またカトリック教会も彼の著作を禁書目録に登録した。

ここまで、東方正教とカザンザキスの「上昇」の概念を軸に、両者の関係の相似性を示し、カザンザキスが「上昇」の概念を東方正教から得た可能性を示した。ところで、神への「参与」の仕方においても、両者には重要な共通点が存在する。それは「自由」である。次節においてはこの「参与」における「自由」について検討する。

4-2: 「神人共働」と「参与」における「自由」

本節では人間の神への「交わり」に対する「神人共働」と「参与」について考察し、カザンザキスの救済に関する「自由」の思想と東方正教に「参与」に関する「自由」を比較する。メイエンドルフによると（メイエンドルフ 2009: 256）、救済と「参与」に関して、大きく二つの「自由」が考えられる。一つ目は神の似姿として創造された人間の本来的な「自由」である。ヨハネによる福音書八章三十二節において「真理はあなたたちを自由にする³³」（日本聖書協会webページより、「新共同訳」から）と述べられているように、神との関係なくして、真の「自由」を手にすることはできず、神を拒否することで人間は自分の身を破滅させることになる。しかし、同時に「自由」とは全ての人間が現に有しているものであり、自分の自由な選択に反して神の国に入ることを強制されはしない。つまり、人間には「神の外に留まる自由」が存在する。すなわち、人間の救済が神の一方的な意志にかかっているのではなく、人間の側でも神に「参与」することを選択することが「自由」として委ねられている。パメラ・フランシスもニュッサのグレゴリオスの自由意志に関して、神の救済に与ろうとする「神人共働」には、神の恩恵と人間の意志が必要であり、彼がこの意志を徳と呼んだ、と述べている（Francis 2005: 67）。

カザンザキスにおいても、助けを求める「叫び」である神の声に応じ、救済への「上昇」の道を選択するかどうかは、この声を聞く人間の側の「自由」にゆだねられている。前章でも紹介したように、理性はこの「上昇」に加わる必然性を問い、救済への道に加わることを妨げようとする。カザンザキスにとって、たとえ自分自身が滅びたとしても、助けを求める神の救済のための「上昇」に加わることは、「英雄」的な決断を通して行われることであり、この助けを求める神の「上昇」のために自身の身を捧げた者がカザンザキスの「英雄」であり、カザンザキスが文学作品を通して描き出した存在であった。しかしここで言われる「自由」も、「参与」において言われた「自由」と同じように、カザンザキスにとって本来的な意味での「自由」ではなかった。カザンザキスにとっての「自由」は、助けを求める神と共に「上昇」することで得られるものであった。これは、「各々の瞬間、私達は彼の喜びのために自分の生命を差し出す準備をしておかなければならない。というのも、生命は目的とならず、むしろ道具であり、それは同様に、死、美、徳、知もそうである。誰のための道具なのか。自由のために戦う神の道具である」（Kazantzakis 1985: 82）と述べられていた通りである。正教的な文脈では、神との交わりと「共働」を拒否し、「参与」に加わらない「自由」が人間に保障されていることは消極的な意味しか持たない。カザンザキスにおいても、助けを求める神の「上昇」に加わらない「自由」は消極的な意味かもしれ

³³ https://www.bible.or.jp/read/vers_search.html （2017年4月1日最終閲覧）

ない。理性の声や誘惑を打ち破り、自身の身を犠牲にして神との「上昇」を選択する者が「英雄」であり、「英雄」は自分に与えられている消極的な「自由」を放棄し、最終的に目指されるべき「自由」への闘いに身を投じる。この点で神との「共働」と「参与」を拒否する「自由」は正教神学的にも、カザンザキスの思想の中でも同様の働きをしており、消極的自由と積極的自由の位置づけは共通している。

4-3: 総括

ここまで、本稿ではカザンザキスの思想を語る上で重要な「上昇」、「神人共働」、「自由」の概念を軸に、東方正教の神学的に見られる要素とカザンザキスの思想の比較を行った。特に上記3つの概念はカザンザキス思想においても救済に関する根本的な概念であり本稿ではカザンザキスが、自身の目指した救済に至る方法論の概念の根本的な部分の直観とモチーフを、自身が生まれ育った地で信仰されている東方正教から得た、と結論付ける。

特に彼に独特の「神の救済」の概念は、単に彼に影響を与えたニーチェが宣告した「神の死」に應對したものには過ぎないのではなく、「神人共働」において救済という現象が生じる際に、人間の行動に最大限価値を置いた際に導出されたカザンザキスの結論であり、西欧のプロテスタント・カトリック圏の思想に接した正教圏側の神学思想に対する最初期の反応の内の一つとして考えられるのではなかろうか。

一次文献

ΔΡΑΓΟΥΜΙΣ, ΙΩΝ (1994) *Η ΣΑΜΟΘΡΑΚΗ*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΒΑΣ ΡΗΓΟΠΟΥΛΟΥ. (Traduit par Marc Terrades (2003) *Samothrace*, Paris: L'Harmatton.)

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, ΝΙΚΟΣ (1909) *Ο ΦΡΕΙΛΕΡΙΚΟΣ ΝΙΤΣΕ ΕΝ ΤΗ ΦΙΛΟΣΟΦΙΑ ΤΟΥ ΔΙΚΑΙΟΥ ΚΑΙ ΤΗΣ ΠΟΛΙΤΕΙΑΣ*, ΗΡΑΚΛΕΙΟ: ΑΛΕΞΙΟΥ.

(以下掲載のカザンザキスの作品は全集版を使用)

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, ΝΙΚΟΣ (1961) *ΑΝΑΦΟΡΑ ΣΤΟΝ ΓΚΡΕΚΟ*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ.

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, ΝΙΚΟΣ (1971) *ΣΥΜΠΟΣΙΟΝ*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ.

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, ΝΙΚΟΣ (1981a) *ΒΙΟΣ ΚΑΙ ΠΟΛΙΤΕΙΑ ΤΟΥ ΑΛΕΞΗ ΖΟΡΜΠΑ*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ.

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, ΝΙΚΟΣ (1981b) *Ο ΧΡΙΣΤΟΣ ΞΑΝΑΣΤΑΥΡΩΝΕΤΑΙ*

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, ΝΙΚΟΣ (1982) *ΟΙ ΑΔΕΡΦΟΦΑΔΕΣ*

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, ΝΙΚΟΣ (1985) *ΑΣΚΗΤΙΚΗ: Salvatores Dei*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ.

Kazantzaki, et Sipriot (1990) *Entretiens*, Monaco: Edition de Rocher.

二次文献

ΑΡΓΥΡΟΠΟΛΟΥ, ΡΩΞΑΝΗΣ (1998) *Η ΕΛΛΕΝΙΚΗ ΦΙΛΟΣΟΦΙΚΗ ΣΚΕΨΗ ΣΤΗΝ ΕΛΛΑΔΑ ΑΠΟ ΤΟ 1828 ΩΣ ΤΟ 1922*, Αθήνα, ΕΚΔΟΣΕΙΣ « ΓΝΩΣΗ ».

- ΓΚΡΟΣΔΑΜΗΣ, ΓΙΑΝΝΕΣ (2009) *ΟΙ 25 ΕΛΛΗΝΟΙ ΣΠΟΥΔΑΙΟΤΕΡΟΙ ΤΟΥ 20ού ΑΙΩΝΑ*, Αθήνα, ΑΡΧΕΤΥΠΟ.
- ΔΗΜΑΡΑΣ, Κ. (2010) *ΙΣΤΟΡΙΑ ΤΗΣ ΝΕΟΕΛΛΗΝΙΚΗΣ ΛΟΓΟΤΕΧΝΙΑΣ – ΑΠΟ ΤΙΣ ΠΡΩΤΕΣ ΡΙΖΕΣ ΩΣ ΤΗΝ ΕΠΟΧΗ ΜΑΣ*, 574-575, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΓΝΩΣΗ.
- ΚΑΡΑΛΗΣ, ΒΡΑΣΙΔΑΣ (1994) *Ο ΝΙΚΟΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ ΚΑΙ ΤΟ ΠΑΛΙΜΨΗΣΤΟ ΤΗΣ ΙΣΤΟΡΙΑΣ*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΑΝΑΚΗ.
- ΠΟΛΙΤΗΣ, ΛΙΝΟΣ (2014) *ΙΣΤΟΡΙΑ ΤΗΣ ΝΕΟΕΛΛΗΝΙΚΗΣ ΛΟΓΟΤΕΧΝΙΑΣ*, Αθήνα: ΜΟΡΦΩΤΙΚΟ ΙΔΡΥΜΑ ΕΘΝΙΚΗΣ ΤΡΑΠΕΖΗΣ.
- ΣΤΑΦΥΛΑΣ, ΜΙΧΑΛΗΣ (1990) *Ο ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ ΚΑΤΩ ΑΠ' ΤΟ ΦΩΣ ΤΗΣ ΔΙΑΛΕΚΤΙΚΗΣ*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΣΤΕΦ. Δ. ΒΑΣΙΛΟΠΟΥΛΟΣ.
- ΨΗΜΜΕΝΟΥ, ΝΙΚΟΥ (1988) *Η ΕΛΛΗΝΙΚΗ ΦΙΛΟΣΟΦΙΑ ΑΠΟ ΤΟ 1453 ΩΣ ΤΟ 1821*, Αθήνα: ΕΚΔΟΣΕΙΣ « ΓΝΩΣΗ ».
- Bidal-Baudier, Marie-Louise (1974) *Nikos Kazantzaki: Comment L'Homme devient immortel*, Paris: Plon.
- Bien, Peter (2007) *Kazantzakis: Politics of the Spirit*, vol.2, Princeton: Princeton University Press.
- Clerment, Olivier (2012) *Byzance et le christianisme*, Paris: Desclée de Brouwer.
- Dombrowsky, Daniel A. (2005) “Kazantakis, Chalcedonian Orthodoxy, and Monophysitism”, in Middleton, Darren J.N. (ed.) *Scandalizing Jesus? Kazantzakis - The Last temptation of Christ Fifty Years On*: 47-60, London: Continuum.
- Francis, Pamela J. (2005) “Reading Kazantzakis through Gregory of Nyssa”, in Middleton, Darren J.N. (ed.) *Scandalizing Jesus? Kazantzakis - The Last temptation of Christ Fifty Years On*: 61-72, London: Continuum.
- Janiaud-Lust, Colette (1970) *Nikos Kazantzaki sa vie, son oeuvre 1883-1957*, Paris: François Maspero.
- Kadelbach, Ulrich (2006) *Mit Kazantzakis auf den Athos: Kretische Spuren*, Kusterdingen: Balistier Verlag.
- Kanteraki, Thalia (2012) “Les études Bergsonniennes en Grèce aujourd’hui,” *Annal Bergsonnines V Bergson et la Politique: De Jaurès à Aujourd’hui*, 5: 501-509, Paris: Press universitaires de France.
- Mackridge, Peter (2009) *Language and national identity in Greece, 1766-1976*, Oxford: Oxford university press.
- Terrades, Marc (2005) *Le Drame de l'Hellénisme – Ion Dragoumis(1878-1920) et la question nationale en Grèce au début de XXe siècle*, Paris: L'Harmattan.
- Tzermias, Pavlos (1986) *Neugriechische Geschichte: Eine Einführung*, Tuebingen: A. Francke verlag GmbH.
- Tzermias, Pavlos (1987) *Die neugriechische Literatur*, Tuebingen: A. Francke verlag GmbH.
- Tzermias, Pavlos (2005) *Aspekte der griechischen Philosophie von der Antike bis heute*, Goettingen: Narr

Francke.

- Wilson, Colin and Dossor, Howard F. (1999) *Nikos Kazantzakis: two essays*, Nottingham: Paupers' Press.
- ベネディクト・アンダーソン著, 白石隆, 白石さや訳 (2007) 『定本想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山 (Anderson, Benedict (1999) *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*, London: Verso.).
- C.M.ウッドハウス著, 西村六郎訳 (1997) 『近代ギリシア史』みすず書房 (Woodhouse, C. M. (1977) *Modern Greece: a short history*, London: Faber.).
- アーネスト・ゲルナー著, 加藤節監訳 (2000) 『民族とナショナリズム』岩波書店 (Gellner, Ernest (1983) *Nations and nationalism*, Oxford: Blackwell Publishers.).
- アンソニー・D・スミス著, 巢山靖司, 高城和義 他訳 (1999) 『ネイションとエスニシティ: 歴史社会学的考察』名古屋大学出版会 (Smith, Anthony D. (1986) *The ethnic origins of nations*, Oxford: Blackwell Publishers.).
- ジョン・メイェンドルフ著, 鈴木浩訳 (2009) 『ビザンティン神学: 歴史的傾向と教理的主題』新教出版社 (Meyendorff, John (1974) *Byzantine Theology: Historical Trends and Doctrinal Themes*, New York: Fordham University Press.).
- 久松英二 (2012) 『ギリシア正教: 東方の智』講談社.
- 福田耕佑 (2015) 「カザンザキスの思想とギリシアナショナリズムー彼の思想の根本と文学作品のライトモチーフとしての「叫び」の観点よりー」『エイコーンー東方キリスト教研究ー』46: 102-128, 東方キリスト教学会.
- 村田奈々子 (2012) 『物語 近現代ギリシャの歴史』中央公論社.
- 村田奈々子 (2013) 「近代ギリシアにおけるヘレニズム概念について」『言語と文化』10: 181-205, 法政大学言語・文化研究センター.

参考URL

https://www.bible.or.jp/read/vers_search.html (2017年4月1日最終閲覧)

謝辞

本稿要旨の校閲には, Franck FAUCONNIER 氏 (関西圏非常勤講師) の助力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

(ふくだ こうすけ 京都大学大学院文学研究科)